



すぎもと たけし  
**杉本 雄** さん

1939年10月29日生まれ

1981年に水俣病と認定される。漁師。

水俣病が奇病として扱われていた頃、言われなき差別を自分のみならず家族が受けてきた状況、水俣病で不自由になった体に鞭打ち漁に出ても魚が売れず、生活に苦しみながらも家族とともに頑張ってきたことや当時の社会背景を語る。

1998年に水俣市の環境マイスターに認定される。

2003年10月から水俣病資料館の「語り部」となる。  
水俣市袋（茂道）在住。

水俣病が原因不明の奇病として扱われていた頃、死因も特定できないまま、葬り去られていった人を私は何人も見てきました。この頃は、汚染された魚を食べたのか、突然カラスが空から落ちてきたり、ネコが狂って死んでしまうという現象も起きていました。また、奇病が発生した家は消毒され、まるで伝染病扱いで、近所の人も寄り付かなくなりました。私の家でも、義母に奇病の症状が出ると、「（奇病が移るので）村から出て行け」と言われ、家畜を殺されたり、船を止めていたロープを切られたり、数え切れないほどの嫌がらせを受けました。また、お金をやり取りすると奇病が移るから米を売ってもらえないなどの差別も受けてきました。堪えきれずに家内と二人で死に場所を探しに行ったこともあります。そんな中で、家族の絆だけが私の唯一の心の拠り所でした。

私も18歳のときから、手足がしびれるなど水俣病特有の症状が出始めました。家内も水俣病に侵され、不自由な体でようやく魚を獲ってきても水俣の魚は買ってもらえず、経済的にも辛く苦しい生活が続きました。このような原因を作ったチッソに責任を認めさせ、せめて家族には人並みの生活をさせてあげたいと、水俣病患者救済活動に走り回りました。当時の水俣はチッソの城下町であったことから、チッソを敵に活動する私たちは水俣市民にとっても敵でした。やがて水俣病裁判が始まり、裏では裁判を取り下げようと色々な方法で嫌がらせをされたこともありますが、家族の励ましもあって、ようやく裁判に勝訴しました。しかし、チッソは水銀を垂れ流しすることは止めず、もちろん私たちも依然として患者扱いでした。

私は、ただ自身の体験を語るだけです。「チッソはなぜ何十年もの間、汚染物質を流してこれたのか」「チッソがなぜ何万人も被害者を出しても未だに営業停止になっていないのか」「なぜ被害を受けた人が患者扱いされたのか」など、私の語りを聞いて、それぞれの方が少しでもこのことを考えていただければ、みんなが安心して仲良く暮らせる時代に近づいていくと思っています。

【写真；昔の茂道漁港】